

|      |   |   |   |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 1960年代以降ハリウッド映画における動物表象

氏 名 佐々木 真帆美

## 論 文 内 容 の 要 旨

近代以前の西洋において、動物は言葉や理性をもたない存在として、人間より劣等なもの、人間にとっての「他者」と考えられ、人間は動物をモノとして扱うことに道徳的問題はないと考えられていた。その一方で近代西洋において、ゆるやかではあるが、人間による動物観は変化をしていき、動物と人間を同等に扱うべきという考えが広まっていった。1960年代に人種差別や性差別に反対する公民権運動が盛んになると同時に、周縁化された存在として、環境や動物にも関心が高まり、「動物の権利運動」が盛んになった。動物の権利運動では、動物実験や工場畜産、動物娯楽やファッションのための動物の毛皮の利用など動物に不必要な苦しみを与えるような人間による動物利用に反対し、動物にも人間と同様に道徳的配慮を与えるべきと考える運動が現在でも盛んになっている。

以上のように私たち人間がもつ動物観は、その時代の社会背景や、動物に関する知識量、動物への共感の度合いなどにより、大きく揺らいでおり、以前には、動物は理性や言語をもたないので人間より下等であるとし、人間は動物をいかようにも扱って良いという動物観が主流であったが、年月が経つにつれ、人間と動物の間に存在した絶対的な境界が崩れ、両者は感情をもつという共通点のため動物を人間と平等に扱うべきという動物観に変わっていき、動物の代弁者として活動する動物保護団体が現在も活動を続けている。しかし、私たち人間は動物を代弁することは可能なのだろうか。この疑問を本論の出発点として考察を行う。「他者」を語ることの不可能性は、サイードが『オリエンタリズム』において指摘している。西洋人が西洋人にとっての「他者」である東洋について表象する際には、西洋の言語や文化、制度、政治的環境といったものの枠組みにはめこまれてしまい、「真理」を語ることは不可能である。私たち人間が人間にとっての「他者」である動物を表象する際にもまた同様であると考え。本論では、1960年代以降ハリウッド映画における動物表象に関する考察を通して、人間は「動物そのもの」を語るができず、動物の代弁者として機能することが不可能であることを証明することを目的とする。

本論では、1960年代以降のハリウッド映画作品からジャンルに偏りが生じないよう、5本の作品を選出し、それらの作品においてどのように動物が表象されているかを考察する。

1960年代以降のハリウッド映画に限定した理由としては、上記した通り、現代の「動物の権利運動」に1960年代から始まった公民権運動が深くかかわっていることに加え、ハリウッド映画史においても

1960年代は一種の変革期と捉えることができるからである。研究者によって多少の違いがあるものの、1960年代前後は、「古典的ハリウッド映画」から「ニューハリウッド映画」への変革期にあたる。「古典的ハリウッド映画」とは、物語のわかりやすさ、因果関係に沿って物語を語ることを重視したものであり、それらを維持するためにコンティニューイティ編集に重点が置かれたものである。そのような「古典的ハリウッド映画」から脱却し、「古典的ハリウッド映画」の特徴を継承しつつ、その形式に囚われない新しい形式を取り入れたものが「ニューハリウッド映画」と呼ばれる。つまり、1960年代以降のハリウッド映画は、「古典的ハリウッド映画」と比べ、自由な表現方法が可能になった作品群であると解釈することができる。本論の作品選定において、1960年代以降の「ニューハリウッド映画」に限定することは、現代の人々がもつ動物観を考察するにあたり有意義なものであると考える。

また、選出作品のジャンルの偏りを避けるために、動物絵本における人間と動物の関係を考察した矢野智司に倣ってジャンル分けをしたうえで作品選定を行う。各ジャンルと本論で扱う作品は下記の通りである。

- 1) 動物だけが登場する映画：『ファインディング・ニモ』(2003)
- 2) 動物の世界に人間が入っていく映画：Dr. Dolittle (1962)と1998年以降のDr. Dolittle シリーズ
- 3) 人間の世界に動物が入ってくる映画：『ジョーズ』(1975)
- 4) 一人の人間と一匹の動物とが会う映画：『シービスケット』(2003)
- 5) 人間が動物に変わる映画：『キャット・ピープル』(1982)

上記5作品における動物表象を分析することによって、全てのジャンルにおいて、人間が動物を語る際には、人間のもつ価値観などが影響してしまい、「動物そのもの」を語るができないことを明らかにする。

1章では、『ファインディング・ニモ』(2003)を扱う。『ファインディング・ニモ』では、人間キャラクターが登場するものの、物語は人間に攫われたニモと彼を助けようと冒険をする父親のマーリンについて中心に描かれており、魚たちの視点から人間が描かれている。『ファインディング・ニモ』は、人間の登場人物たちへの魚たちに対する行為を魚たちの立場から批判する。このような批判は、生物学的事実を、物語を語るうえで都合よく無視したり、人間のもつ価値観を物語に反映させたりすることによって行われている。しかしこのような著者自身の批判自体も、人間中心主義によって成り立つ生物学をベースとした批判でしかない。人間による人間中心主義的行為を批判しようとしても、人間中心主義的行為の枠が広がっていくだけであり、人間はそこから抜け出すことができないということを明らかにする。

2章では、Dr. Dolittle (1962)と1998年以降に公開されたDr. Dolittle シリーズの比較を行う。ヒュー・ロフティングの『ドクター・ドリトル』シリーズを基に創られた作品であるリチャード・フレッシュャー監督のDr. Dolittle (1962)と、さらにそのリメイクとされるDr. Dolittle (1998)、その続編であるDr. Dolittle 2 (2001)とビデオ映画として販売されたDr. Dolittle 3 (2006)、Dr. Dolittle 4 (2008)、Dr. Dolittle Million Doller Mutts (2009)は、「動物と話せる医者」という同じモチーフを使っているが、物語はそのテーマから大きく異なる。このような変化には制作当時の社会背景が大きく関わっていると考えられる。1960年代に製作されたフレッシュャー監督のDr. Dolittle は、白人男性中心主義の社会の中で周縁化された動物の代弁者として主人公たちを位置づけることによって、人間による動物の扱いを批判する。一方、1990年代には、白人男性中心主義の中で「周縁化されたもの」としてまとめられた人たちの中に存在する差異に注目が集まり、より「個人」に目が向けられた時代であった。1998年以降のDr. Dolittle シリーズは、主人公の個人の問題に焦点を当てることによって、時代

背景と呼応させている。このように、動物について語る際には人間が作る社会が影響を与えているということを明らかにする。

3章では、『ジョーズ』において、はじめは人間にとっての理解できないもの、「他者」としてサメが登場する。物語の前半では、サメの姿は観客の目にも登場人物の目にも映らない形で登場し、不気味さという、西洋文化の歴史の中で「女性性」と結びついて語られてきた形で描写されている。しかし、サメに対して登場人物たちが繰り返し男性単数を表す「he」を代名詞として用いると同時に、少しずつサメの姿を提示することによって、サメは男性化される。登場していたサメを男性化することによって、この作品はサメを理解可能なもの、対峙可能な敵として描き出していることを本章で指摘する。このような描き方をするので、サメと人間登場人物は一見平等に描かれているように見える。しかし、サメを男性化することは、サメに男性イメージを投影していることであり、このような行為自体が動物を客体化して語っているのであり、本作品の中で人間中心主義的な力が作用していることを明らかにする。

4章では、『シービスケット』を通して「アニマル・スポーツ」である競馬について考察を行う。「スポーツ」という言葉は、「人間が自発的に参加する競技」という定義があるものの、「アニマル・スポーツ」では、動物がその意思とは関係なく、人間によって参加させられているという点で、「スポーツ」の定義には当てはまらない。しかし時に人間は、動物自身も人間と同様に自らの意志でスポーツに参加し、楽しんでいるという幻想を抱くことがある。このような幻想が『シービスケット』では顕著に表れている。『シービスケット』では、実在した競走馬であるシービスケットの感情を勝手に語り、シービスケットがもつ競走馬としての資質を引き出してあげたという人間の価値観をシービスケットに強要するという、人間による動物の客体化によって成り立っている。本章では、このような人間中心主義的権力が、主観ショットやナレーションなどの映画技法によってどのように隠蔽されているかを明らかにし、「アニマル・スポーツ」を描いた映画作品を、人間と動物の絆を描いた単なる感動の物語として描き出し、また受容することの危険性を指摘する。

5章では『キャット・ピープル』(1982)において、人間から動物へ変身する登場人間は、人間にとっての「他者」として扱われているネコ科の動物（黒豹）に変身をする。このように、物語の中で変身することと他者性が結びついて描かれていることを指摘したうえで、さらにその他者性が、他の登場人物や観客たちに非規範的と見做される近親姦と結びついていることを明らかにする。本作品は、人間が動物に対して抱くイメージ、つまり動物は人間にとっての「他者」にしかなりえないというイメージを利用して、非規範性を物語にもちこむ存在として動物に変身する登場人物を描いている。変身することと他者性、そして非規範的な近親姦を関連させて語ることによって、動物は人間の規範性を攪乱しうる存在として物語の中で語られており、翻して考えれば、非規範的なものを語る上で、動物という「他者」がもつイメージをこの作品内ではうまく利用しているということを指摘する。

以上の議論から、人間は「動物の真の姿」を語ることはできないということを明らかにする。人間が動物について語る時、意識的にしろ無意識にしろ、その語りの中には人間がもつ価値観や社会背景が影響する。人間が語る以上、人間のイメージを動物に投影させるか、そのイメージを利用してしか動物を語るができなということを本論の結論とする。